

審査の結果の要旨

氏名 輪島 裕介

文化研究の射程が大きく広がった今、日本のポピュラー音楽文化に関する研究も急速に盛んになりつつあるが、ポピュラー音楽と言っても、そのジャンルやコンテキストがきわめて多様であることもあって、個別事象の枠の中にとどまる研究が多く、その展開をトータルに捉え、日本文化の全体的なあり方に関わる問題系のうちにおいてみるような広い視野をもった研究はほとんどなかった。

本論文は、第二次大戦後日本のポピュラー音楽文化の展開について、音楽そのものではなく、それをめぐる言説の方に焦点をあわせることによって、その根柢にあった理念や論理、そこで想定されていた文化像といったものを浮き彫りにした論文である。

第1部『『流行歌批判』の時代』では、昭和初期から説き起こし、戦後、1960年代初頭までの日本で、左派勢力を中心に、流行歌などのレコード歌謡を低俗として批判し、それに代わって国民が共有できる「真正」な大衆音楽を求める大きな流れが形成されていった過程が描かれ、そこでの切り札として「民謡」の概念が機能したことなどが論じられる。

第2部「対抗文化的レコード歌謡論と『演歌』の誕生」では、1960年代後半に生じた、それまで低俗として批判されてきたものを「土着」、「被抑圧者の怨念」等の形で読み替え、逆に称揚する、旧来のレコード歌謡批判を戦略的に裏返すような動きが論じられる。それと連動して「演歌」というジャンルが切り出され、新左翼的ジャズ批評などとも結びついて「若者文化」として対抗文化的に機能するようになる過程が克明に描き出される。

以上の2つの部分を受けて、第3部『『日本人論』と『洋楽』の自明化』では、この対抗文化的な大衆音楽観が、より広範でグローバルな文化的環境の中に拡散してゆく過程が、民俗音楽学者小泉文夫の活動や、ワールドミュージック・ブーム、「日本ロック」の確立といった多彩な現象の検討を通じて明らかにされる。

本論文は、「真正」な大衆音楽への志向と対抗文化によるその再編成という構造を抽出する骨太な議論によって、戦後日本のポピュラー音楽史をマクロに捉えることに成功しており、今後、戦後日本の音楽文化を論じる際に常に基準として参照される基本文献になりうる、きわめて優れた研究と評価できる。そのような視座を獲得することによって、本論文の中核である「演歌」の出現のみならず、他の様々な事象についても、これまでにない斬新な解釈、位置づけが提示されており、個々の議論に関してもみるべきところが多い。

言説の重層的なあり方や、音楽の実際の展開の多様性を必ずしも十分に捉え切れていない面があるなど、課題も残るが、これは明瞭な構造を抽出しえたことの副作用ともいえるべきもので、得られたものの価値に比べれば、大きな瑕疵とは言い難いものである。新たな知的展望をひらく労作として、本審査委員会は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいと認定するものである。